

~~~~~  
書評・紹介  
~~~~~

石井公成著

『華嚴思想の研究』

織田 顕 祐

本書は、著者が、一九九三年に早稲田大学に提出した学位請求論文「華嚴教学史の研究」を第一部とし、それに二篇の資料を加えたものであり、ここ十数年にわたって著者が精力的に発表してきた研究成果を全て盛り込んだものである。著者の石井公成博士は、華嚴宗の智儼の思想の研究を發端とされたが、現在の問題意識は多岐にわたっている。そして、その該博な識見によって華嚴教学の伝統的な学説に対して従来からもいくつかの先鋭的な問題提起をしてこられたが、本書はそうした石井博士のこれまでの研究をほぼ網羅するものである。著者が華嚴教学の従来の伝統説を見直していく視点は、主に次の二つである。第一は、これまで全く触れられることのなかった敦煌文献中の地論宗関係典籍を用いて華嚴教学を見直すことであり、第二は、義湘の伝統を引く新羅の華嚴教学の伝統によって従来の学説を見直すことである。さらにこのような資料の調査にコンピュータを導入することにより、従来は不明とされていた出典を明らかにするなど、本書には新たな研究方法による研究の成

果が遺憾なく發揮されており、注目すべき問題提起がいくつも為されている。以下、その梗概を紹介したい。

本書は、三部よりなっている。第一部は既に述べたように著者が早稲田大学に提出した学位請求論文「華嚴教学史の研究」である。第二部は「地論宗の諸文献」と題され、①地論宗の出発点である勒那摩提の『七種礼法』、②天台系の文献中に説かれる地論宗の教説、③敦煌文献中に見える地論宗の教説、の紹介である。第三部は、これも地論宗の開創と大いに関係が深い仏陀三蔵の『華嚴經兩卷旨帰』（金沢文庫所蔵）の翻刻と校注である。科文が付され綿密な校注が行われているので、今後の研究の第一次資料とすることができであろう。なお、第二部と第三部は第一部の論旨を展開するための基礎資料であり、そのために一冊にまとめたものと思われる。

第一部は次ぎの七章からなる。第一章は地論宗における『華嚴經』解釈——『華嚴經兩卷旨帰』を中心として——と題され、第三部で紹介される金沢文庫所蔵の『華嚴經兩卷旨帰』に対する文献学的な研究である。金沢文庫所蔵の『華嚴經兩卷旨帰』は、その存在が早くから知られていたにも関わらず、資料として紹介されることもなく、内容に関するまとまった研究もこれまで無かった。撰者の「仏陀三蔵」は、地論宗の慧光に大きな影響を与えた人であり、この時代に成立してくる禪宗とも重要なつながりがある。この意味で『華嚴經兩卷旨帰』は、北魏仏教の思想的な特徴を知る上で非常に貴重な文献である。しかし

ながら、内容的にはいくつかの疑問点もある。著者の結論は、本書は後の時代に翻訳された経典を引用することから偽作と考えられ、隋・唐時代の仏名信仰の流行の中で成立したものである、というものである。ただ、教理史的な側面から見れば古い時代の華嚴経観を表現しているとしか考えられない点もあり、明確な判断は下しにくいとしている。

第二章は**智儼の華嚴教学**と題され、三節からなる。華嚴教学の事実上の開祖といふべき智儼の思想を性起説と「無尽」という概念から考察したものである。著者は、智儼の思想がそれ以前の地論宗教学と切り結ぶ点は、唯淨の性起説を立てたことにあるとする。そして、それは淨影寺慧遠らの煩瑣な教学に対する批判であり、実体論に陥りやすい慧遠の如来藏説からの根切れであったと結論づける。又、『華嚴経』は性起品などの他に例を見ない所説だけにその特徴があるのではなく、性起品などを説きながら一方で三乗の教えも説くところに本当の特徴があるのであり、この点を智儼は「無尽」と表したのである、とする。この指摘は非常に重要であり、華嚴教学の中心思想である同別二教判を考えていくためには不可欠の視点であると考えられる。第三節では杜順説・智儼記と伝えられる『一乗十玄門』を考察して地論教学の強い影響下で智儼の教えを受けたものが自らの見解をまとめたものであると推測している。

第三章は**新羅の華嚴思想**と題され、六節からなる。義湘と元曉の思想を検討してこれまでの伝統的な華嚴教学についての常識を見直そうとするとところに大きなねらいがある。まず第一

節では義湘帰国以前の新羅における思想的状況に關説して、通宗を拠り所とする地論系教学や隋から初唐にかけての先端教学であった撰論学が比較的是やい時期に渡来していたことを明らかにする。

第二節では元曉の思想的立場を新旧両思想の対立の最初期と位置づけ、その特徴である和会思想の根柢としての『起信論』理解と、『起信論』がどうしてその根柢となりえたのかという点の解明がなされる。著者は、『起信論』が一心二門の構造によつて空有のいずれをも立場としないことがその根柢であると指摘する。

第三節と第四節は新羅華嚴学の始祖である義湘の思想に関する研究である。まず第三節では、特徴ある義湘の『華嚴一乘法界図』について、それは入唐以前から学んでいた地論教学を下敷きとして智儼の教えを重ねて当時流行していた回文詩の形式にまとめたものであると指摘する。なお本節で、義湘と智儼との思想的連関を明らかにしていく過程で指摘されたいいくつかの点は興味深い。中でも智儼の教判思想の形成において頓教の概念が『搜玄記』から『孔目章』にかけて変化していくが、それは禪宗の東山法門を論争相手とすることによるものであると指摘された点は重要である。

第四節では義湘の理相即説が究明される。ここでは華嚴教学の中心思想とされてきた理事無礙説における「理」と義湘の理相即説における「理」とは内容が異なるという主張が興味深い。この点を著者は、「無分限」である理事無礙の理の概念

が変化して個々の理となったのであるが、それはむしろ地論宗以来の伝統的な理解への復帰であるという。この理解は、『十地経論』の「此の言説解釈は当に知るべし、事を除く。事とは謂わく陰界入等なり」の所説を理に関するものと解釈して、六相説は理を表すものであるというのが地論宗の基本的な考え方であることに基づくものである。しかし、『十地経論』のこの箇所はそのようなことを言っているのではない。この点は、智儼の華嚴教学の出発点や法蔵の六相説の基本的立場とも絡む重要な問題なのでいづれ稿を改めて論じたいと思う。

第五節は、法蔵の作が疑われてきた『華嚴経問答』の研究である。法蔵の著作に関する研究が本章に於いて扱われているのは、著者がいくつかの理由によって『華嚴経問答』は義湘系の新羅文献であると考えるからである。著者がこのような結論を得たのは、『華嚴経問答』には『搜玄記』や『孔目章』を始めとする智儼の思想に加えて義湘独特の用語も用いられるのに対して、法蔵の他の著作との用語的な共通性がほとんど見られないことによる。

第六節は、元曉の基本姿勢について触れた短いもので、その要点は、義湘帰朝以前と以後にわたって元曉の基本姿勢は変化していないこと、義湘に刺激されて『華嚴経』に関心を持ったがその経疏の序文の基本には『莊子』の影響が認められることの二点である。

第四章は**法蔵の華嚴教学**と題され、三節よりなる。このうち第一節は、法蔵の『華嚴五教章』の義理分齊に説かれる縁起

説について、主として「縁起因門六義法」を中心に考察したものである。法蔵の縁起観の特徴は同体・異体、相即・相入といった概念を組み合わせて説くところにある。従ってそれらの用語が理解できなければその本質を知ることができない。著者は因門六義法に関して空・有、有力・無力、待縁・不待縁といった概念が、「一法の二面であって、観点の相違であり、空と有という別々なものが次第に接近して一体となるのではない」という観点を明らかにしている。この指摘は縁起法を考察するに当たって決して見逃すことのできない点である。そうであれば因門六義法の内容は、次ぎのように考えることができる。即ち、それは、先ず因果縁起における「因」について相待する三つの視点（空・有、有力・無力、待縁・不待縁）の組み合わせであり、単純に組み合わせれば合計八となる。このうち「無力不待縁」とは、なんらの結果も生じないことを意味するから因とはならず、八の組み合わせから「空無力不待縁・有無力不待縁」を除外して合計六となるわけである。このように見れば因門六義法は極めて論理的な構造をもった「因」解釈であることが了解されるであろう。そして因体の空有に関する相待が「同体門」であり、力用の有無に関する相待が「相入門」である。このような六の側面をもったものを「因」と称するのであるというのが、法蔵の意図であろうと思うが、これを著者が「AとBと言う二つの法について適用」（三〇七頁）して法蔵の縁起説を考えていこうとするのはどのような理由によるのであろうか。評者には理解できない。法蔵の思想の中心に関わる問題だけに

今後の議論を待ちたい。

第二節は、従来の伝統説の中では、法蔵が事事無礙説を主張し、それが華嚴教学の頂点を表すものであるかのように扱われてきた事を再検討している。著者によれば、それは事実に関し、そのような見解が常識となつたのは随分後代（日本の凝然以降）ではないかと推察されている。

第三節は、法蔵の『梵網經菩薩戒本疏』に見られる菩薩戒思想を検討したものである。大乘仏教の本質と具足戒とがどのようにに関わるかという問題は、仏教理解の根本に関わる問題である。しかし、中国の仏教者にこの点が明確になるには相当の時間が必要であつた。法蔵の前後に『梵網經』の注釈を表した人が多いのはこのような事情を表すものと思われるが、著者は、法蔵のこうした態度を「現実主義的で妥協的」なものとして批判する。

第五章は新羅華嚴思想の展開の一側面——『釈摩訶衍論』の成立事情——と題され、従来から様々な論議を巻き起こしてきた『釈摩訶衍論』に関する研究である。本章は、二節よりなる。第一節は『釈摩訶衍論』の内容を検討して、それは『起信論』研究の進展にもなつて出現した様々な異説を会通するために新羅で造られたものであると結論づける。第二節では、『釈摩訶衍論』の中心思想である「不二摩訶衍」説は、『維摩經』の入不二法門品における「不二」についての三十二菩薩の解釈に維摩詰の默然を加えたものと『起信論』の「摩訶衍」とを真如の不可説性のもとに結びつけたものであることが明らかにされ

る。

第六章日本の初期華嚴教学——壽靈『華嚴五教章指事』の成立事情——と第七章聖武天皇の詔勅に見える誓願と呪詛——は、わが国における『華嚴經』の受容と華嚴教学の出発点を検討したものである。わが国の古代における『華嚴經』受容の始まりは東大寺の大仏建立に象徴されるが、それは純粹に総国分寺と国分寺とを事事無礙的に融合させ連華藏世界を建立しようとした『華嚴經』信仰の結果なのではなく、『金光明經』の護国思想をより強力に發揮する靈力を盧舍那佛に求めたものであつた、という点が第七章の中心的な課題である。そのような状況の中で「聖武天皇によつて尊崇された盧舍那佛の經典」（四二二頁）である『華嚴經』は諸經典の根本であると理解された。このような理解は一方で他の經典を輕視する「華嚴至上主義者」を生んだが、壽靈の『華嚴五教章指事』が論争の相手としたのはこうした人々であり、決して法相宗徒ではなかつたというのが第六章の中心的な課題である。そして『華嚴五教章指事』の成立年代を「奈良朝末期から平安の初期」（四一五頁）と推察し、この時代は既に祖師の「解釈の是非を争う訓詁注釈の時代に入りつつあつた」（四三六頁）ことが指摘される。

以上が本書第一部の梗概である。『華嚴思想の研究』という書名の通りに中国の華嚴教学に関する問題から、日本の聖武天皇の華嚴觀に至るまで極めて幅の広い問題が扱われている。これは著者の関心が極めて幅の広いものであることをよく表して

いる。そして、これまでの研究成果をほとんど調べ尽くした上で著者自身の意見が述べられる事は、著者の博識ぶりをよく伝えるものである。著者には失礼であるが、本書をこれまでの研究資料目録として活用する人があるかもしれないと思われるほどである。またコンピュータを駆使して原典を探し出し、それに基づいて従来の考えを改めていこうとする点にも新しい研究方法を感じる。このような点で、本書は独自の華嚴研究の境地を切り開いているという事ができよう。本書は、著者自身が序論で「狭い意味の華嚴教学の研究とならないよう留意した」

(一四頁)と述べるように、華嚴教学の特定の課題を求心的に論究したものではない。それ故、「法蔵の華嚴教学」といった課題に触れる場合でも、例えば法蔵の思想は現代の人間にとつてどのような意味があるのかといった主体的な問題にはほとんど言及しない。このような問題は研究者の個人的な問題であるという事になるのかもしれないが、「法蔵の華嚴教学」といった課題をつけるのであれば、研究者の個人的な関心だけで済ます事のできない問題もあるように思う。また、主として漢文文献を用いながら、引用文が全て白文であるというのも如何なものであろうか。著者自身は漢文を訓読しないのかもしれないが、少なくとも現在における研究成果の表現の方法としては、当該の文章をどのように読んだのかという事を明らかにするために、

最低返り点が必要であると思う。本書の中でも論旨の展開上特に重要な場面では書き下し文にして改めて引用しなおすという箇所も多々あるのであるから、全体にわたってそうした配慮が為されたならば本書の価値は一層高いものとなったであろう。教証とする原典をどのように読んだのが分からないような引用の仕方では共通の議論が成り立たないだけに評者が残念に思う点である。また、著者は博識であるが故に、議論がやや傍論に互ると思われる箇所が間々あることは、主張の緊張をゆるめ、結果として論旨を分かりにくくしている点が否めない。

最後に、本文中の重要な場面に多少誤植があること(五三頁六行め通宗↓通宗教、一〇九頁九行め同教二教↓同別二教、一三四頁七行め初発心時弁成正覚↓初発心時便成正覚、一五六頁一八行め法蔵↓智儼、須陀含果↓須陀洹果、二一二頁二行め大乘起信論義略探記↓大乘起信論内義略探記、二六〇頁一一行め「相」と一三行め「相事」の異なりなど)や、引用文に不統一(一九四頁から二〇〇頁の間の引用文だけは書き下し文、また二七八頁の引用文のみ現代語訳)があることもない問題ではないが、本書の全体の価値から言えば大した問題ではない。

【一九九六年二月二十五日 春秋社 菊版  
XV+五六〇頁 二二五頁 一五頁 二六〇〇〇円】